

書 評

『アウトバーンとナチズム—景観エコロジーの誕生』[小野清美著]  
(ミネルヴァ書房, 2013年)

小野寺拓也

ドイツ史における「連続性」。この問題は今なお、ドイツ史研究が避けて通ることのできない課題であり続けている。自分の研究対象は、ホロコーストや絶滅戦争を生み出した「負の極点」とでも言うべきナチ体制と繋がっているのかいないのか、繋がっているとすればそれはどのような繋がり方であるのか。近年欧米では、「特有の道」論の否定が一種のコンセンサスとなっているように見受けられるが、強く否定するということが自体が、その裏にある「連続性」という課題の根強さの証拠でもある。

このドイツ史研究上の焦点に対して、著者である小野氏は研究人生を通じてつねに向かい合ってきたと言える。しかも本書は、環境・景観という視点から新しい視座を提供するものとなっている。著者のこれまでの研究の歩みや研究姿勢、本書の位置づけについては川合全弘氏によるすぐれたまとめがあり、評者もこれに同感である<sup>(1)</sup>。評者はあくまで「連続性」という視点から、本書の評価を行いたい。

なお「連続性」は、18世紀や19世紀からナチズムへの連続性でも、ナチズムから戦後のエコロジー運動への連続性の問題でもありうるが、後者については藤原辰史氏との論争や応答を通じて論点が明確になっているため<sup>(2)</sup>、本書評では前者に限定する。

本書において注目されるのが、19世紀末の郷土保護運動やフェルキッシュなナショナリズムからのつながりだけでなく、ロマン主義とナチズムとの関係がもう一つの層として取り上げられている点である。もちろんロマン主義と言ってもその内実は複雑をきわめるし、著者も注意深く区別するように、19世紀への転換期のロマン主義と19世紀末のネオ・ロマン主義とでは性格が異なる。しかしそれでも、「自然への感性的美的アプローチや生命的有機的なものとしての自然の見方」、「道具的理性の一面的貫徹や技術的物質文明に対する」(本書19頁)批判という要素が、「モデルネ」の文脈だけでは捉えきれないことも確かであろう。

その複雑な関係を体現するのが、景観代理人アルヴィン・ザイフェルトである。

(1) 川合全弘「書評 小野清美著『アウトバーンとナチズム—景観エコロジーの誕生』『ゲシヒテ』7号(2014年), 75-79頁。

(2) 小野清美「ナチズムと『緑』の問題をめぐる—藤原辰史氏に応答する」『阪大法学』63巻3/4号(2013年), 1001-1025頁。

学生時代にヴァンダーフォーゲルで活動し、1920年代中頃から郷土保護運動で積極的に活躍するようになったザイフェルトは、ナチ期にアウトバーンの建設が活発になると、ドイツの「文化景観」の悪化に警鐘を鳴らすようになる。生態系のバランスが破壊され、「ドイツの土地のステップ化」、失われる景観の美によって、「郷土のもつ、人の心をささえ、バランスを回復し元気づける力」(153頁)が失われてしまうことを彼は恐れた。道路建設などによって生じた荒地は放置せず、その土地本来の樹木や灌木を植えて景観を修復すべきことを、彼は提言した。このように彼は道路などの建設自体は否定せず、景観の中に自然を埋め込んでいくべきだという態度を示した。彼の意見はドイツ道路制度総監トットに認められ、景観代理人の長に任命される。

彼はアメリカやイタリアのような直線主体のアウトバーンではなく、地形の起伏に沿って緩やかに蛇行させた、景観にマッチするアウトバーンを提唱した。直線は計算合理主義の現れであるし、そもそも単調な景観はドライバーの眠気を催し危険である一方、蛇行は「生命体のリズム」に合致しており、リズムを持って弧を描く道路のほうがドライバーにも自由・快適だとザイフェルトは主張し、反対を押し切ってこれを実現させる。そうした美意識の背景には、フランス式庭園のような人工性への反発があったと著者は指摘する。

ザイフェルトはまた、中央分離帯や道路両脇の植栽にも意を注いだ。「その土地本来の」樹木を植え、かつての郷土景観を復活させるべきであり、その土地に本来なかったものを植えれば、「アウトバーンは、外来種によるドイツの森の汚染とともに責任を負うことになり、みずからに重大な汚点を残すことになる」(176頁)と主張した。また、「われわれは広葉樹景観のなかに持ち込まれた針葉樹を見たくないし、よい粘土質土壌に白樺を見たくはない」(177頁)とも述べて、広葉樹混合林の再建も要求した。この主張は、道路の幅を広く取って「自動車道路の偉大さと立派さ」を誇示したい当局との衝突をもたらすことになるが、ザイフェルトは自分の意見を押し通した。

さらに彼が推進したのが表土保護という考え方であった。表土とは、長い間に植物や生物など有機物が分解して堆積した栄養豊富な表層土であるが、ザイフェルトによればこれは何千年もかけて自然につくられた「われわれの全存在の基礎」であり、「表土を荒廃させることはわれわれの民族的存在の取り返しのつかない貧弱化」(190頁)をもたらすとされた。ただし戦争準備の中で、この考え方は実際には必ずしも守られなかったようである。

しかし以上のような景観保護、生け垣などの植栽、表土保護という考え方はヒムラーによって全面的に受け入れられ、東部植民地への「ドイツの景観」の移植が目指されるようになる。ザイフェルトも「全ドイツを生け垣景観に」「全ドイツを庭に」を標語にしながら、1944年に出版した『生け垣景観』では次のよう

な議論を展開する。切り倒される生け垣、人工肥料によってやせた土地は「もろもろの病んだ現象」「重病ですらあり」、これ以上「略奪農耕」を続ければ、ドイツの土地は持ちこたえられなくなる。「ひしめき合う豊穡な網目状の土地に、水平線から水平線まで広がる土生生け垣の網の目、果樹の連なり、畑、牧草地、放牧場、静かな酪農場、広い城の所領、清潔な農村都市、良好な道路網——この最高の完全さにおいて現れるゲルマン的文化的景観！」(329-330頁)。

このように、ザイフェルトとナチズムには明らかに大きな重なり合いが存在する。一つは反アメリカ、計算合理主義や人工性への反発に見られるような近代批判であり、第二は神秘的な「ドイツの森」イメージとも結びついた民族主義的ナショナリズムの自然観であり、第三には外来種の排除に端的に見られるようなナチ的レトリックとの近しさであり、第四にこうした考えが「ナチ人種主義帝国主義にまったく無批判に、それどころか、便乗」(333頁)することさえ可能だったという点である。このような重なり合いが生じたのは、一つには彼がナチ「革命」に「生命の時代」への転換という「根本的な幻想」を抱いていたからでもあった。「この革命は、一方における計量できるもの、数えられるものへの崇拜の中で消費していた西欧的、ボルシェヴィズム的物質主義と、他方における魂、信仰、畏敬、郷土、自然を基礎とする世界観との、最終的対決以外の何ものでもない」(268頁)。

他方著者は、この両者に大きな断絶があったことも指摘する。ザイフェルトの書いたものには、ナチ人種主義や反セム主義思想の援用がほとんど見られず、これから距離を取っていること、彼はナチズムのダーウィニズム的自然観を公然と批判していること、彼が用いた「血と土」も遺伝的な意味ではなく民族の文化的伝統を意味するものだったこと、彼を特徴付けていたのは過去復帰的な農業ロマン主義ではなく、現実的アプローチであったことなどである。「彼の思想を固有の意味の人種主義フェルキッシュ思想やナチスと一括りにしてしまわないようにせねばならない」(284頁)と著者は、安易な議論をいましめる。

本書評でザイフェルトを中心的に取り上げたのは、この人物が示しているナチ体制との「部分的一致」が、「ふつうの人びと」の体制への関与を考える上でも重要な示唆を与えていると感じたからである。「ロマン主義美学の正統的な流れを汲み、「相対的にナチ政治から独立した意志」(川合)<sup>(3)</sup>をもつザイフェルトは、にもかかわらずなぜ体制に協力するに至ったのだろうか。言い換えれば、ナチとは多くの点で異なる人びとを自然・環境という視点はいかに体制へと統合し得たのだろうか、あるいは統合できなかったのだろうか。

これに対して著者は次のような見解を示す。ナチズムには固有の首尾一貫した

(3) 川合「書評」, 77頁。

「緑」の思想も、「緑翼」と呼びうるような人的なまとまりも存在しない。ただ市民層、とくに教養市民層を把握する必要性からこれを無視することもできず、ナチズムに備わっていた「時代の流れを読む力と中央集権化による突破力」もあって、これを部分的に実現するに至った。ナチ体制は「綱領が曖昧で、かつ完全なイデオロギー統制をせずむしろ自由な解釈を許したので、多くの知識人・官僚・エンジニアは私的な確信を犠牲にする必要がなかった」(343頁)。それ以前からの連続性の多くと衝突することなく、むしろかなりの領域で相互協力が成り立ったのは、両者のこうしたプラグマティックな関係に大きな原因がある。

だがナチ体制に自然保護を実現する内在的な理由がないわけではなかった。そもそもナチズム、とくにヒトラーにおいて「自然」や「生命」がきわめて重要な概念であった(ただし彼らの言う「生命法則」はむき出しの生存闘争としての自然状態への回帰であり、「緑」とは無縁であったと著者は353頁で指摘している)。また、ドイツ人によって特別な森の景観やエコロジーの問題を前面に出す市民層の運動を、ナチ当局は民族の「財産」と「健康」の問題として受け止め、これに対応した。

こうして、著者が打ち出すナチズムと広い意味での自然保護陣営との関係は、きわめて複雑な様相を呈する。第一に、「自然景観と人間ひいては民族の内面との相互関係というロマン主義以来の観念、および、世紀末ネオ・ロマン主義の中で広がった『自然』を符牒とする都市化・工業化の弊害の批判、生活世界における自然との再結合の動き、民族衛生という観念」(360頁)、第二にナチズムにおける政治の美学化、第三に自然・芸術・文化によって技術を正当化する「ドイツ技術」、これらにおいて両者には広範な重なり合いが見られた。「元来、非政治的運動であり政治的綱領や政治勢力との連携に関心をもたなかった自然保護陣営は、ナチズムを批判しうる固有の立脚点をもたなかった」(362頁)のである。他方両者には質的な違いが厳然として存在する。ナチズムのダーウィニズム、人間を動物と同一平面におく動物生命一元論、あくまでも徹底的な合理化と効率的な業績共同体の建設という文脈の中での自然保護、戦略目標のためには自然破壊もいとわないご都合主義などである。

しかし著者の議論はさらに捻れる。「本来の理念や目標で本質的に異なっている、思考様式のレベル(美的感覚の絶対化、美的芸術的表現主義、その政治への直接的投影)において、ナチズムとロマン主義の間に共通性があることも否定できない」(364頁)のではないかと。それは、「多元的利害の調整という本来的政治を否定した非政治的政治の中で、創造活動が即、新しい政治の実質であるかのように、技術による芸術的表現それ自体に熱中」(365頁)するという状況を生み出した。美的なものが意味への問いや道徳から切り離され、最終的にナチ支配へと組み込まれていったのである。

評者は以前、本書の内容も紹介しながら、ナチ体制における自然保護について講義を行ったことがある。そのさい、ある学生からは次のようなコメントが寄せられた。「どこから恐ろしいものが忍び寄ってくるかわからないという怖さがある」。おそらくこれこそが、ナチズム研究を通じて我々研究者が伝えていかなければいけないことのひとつなのだろう。物事は白黒はっきり区別できるものではないし、しかもその白黒が容易に反転し、あるいは相容れないと思いついてきた白と黒が容易に接合することが、歴史上何度も起こってきたのだ、と。だからこそ（そもそも白とか黒とかが何なのかということも含めて）考え続けることをやめてはいけない、と。

そのために必要なことは、複雑なものを複雑なままに提示することであろう。言い換えれば、状況の複雑さを可能な限り整理した上で、なおかつそれが複雑だということを、状況を単純化することなく提示することである。つまりは歴史的な事象を可能な限り内在的に理解し、それと粘り強く向き合うということに尽きるものであり、本書を含む三部作において評者が感服せざるを得ないのは、著者のそうした強靱な忍耐力にある。本書評ではその複雑な行論の数分の一も伝えることはできなかったが、しかし行きつ戻りつの議論が立ち止まるその場所に、読者が考え続けるヒントが埋め込まれているのではないだろうか。